



生活やものづくりの学びNetニュース

巻頭言

18 歳成年実現を喜びあえるものに

齊藤 弘子（家庭科教育研究者連盟）

1. 3月に異例の文科大臣「メッセージ」

今年 3 月 25 日、末松文科大臣は（全ての高等学校教育関係者の皆様へ）と、「新学習指導要領のスタートを契機とするこれからの高等学校教育について」を出しました。高校の 4 月からの新教育課程実施に向け「成年年齢の引き下げは、若者の積極的な社会参加を促すなどの重要な意義を有する」としながら「一方で、保護者の同意なく、自らの意思のみで契約を結ぶことができることから、消費者として被害を受けることも懸念される。」とし「これを見据え、新学習指導要領の家庭科に盛り込んだ『契約の重要性』や『消費者保護の仕組み』に関する指導内容を前倒し、その実施に取り組んできた。（中略）4 月からは新しい必修科目『公共』や『家庭科』の新しい教科書で一層充実した教育を進め」と、18 歳成年実現に関わって「家庭科」や「公共」を取り上げていました。

今年 1 月、NHK で 18 歳成年実現に関して若者 100 人に聞くという番組がありました。100 人中、最も多くの 43 人は「親の同意なしで契約可能になった」を回答しました。18 歳になれば、自分ですべて考え行動できるという自由を手に入れたのです。

140 年前から続けられた「成年は 20 歳」が改定され、世界では当たり前の「18 歳は子どもでない」がようやく実現したのです。

私は、この 18 歳成年を、既に 6 年前に実現した 18 歳主権者と共に、若者たちが「待ちに待った！」と喜びあえ、自信をもてるものにしていきたいと願っています。

家庭科での学びは、高校生たちが学びたいと考えている課題を追求し、生活の隅々に主権者としての意識が形成される実践を望みます。

2. 若者は自分自身をどのようにとらえているのか —内閣府調査より（2018 年）

若者の自己肯定感が低いということはよく言われていますが、内閣府が行った若者（13 歳～29 歳）調査「日本の若者意識の現状」—日本、韓国、米、英、独、仏、スウェーデンとの比較調査です。

「自分自身のイメージ」では、「自分には長所があると感じている」の質問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答したのは 62.3%で他国と遜色ありません。しかし「自分は役に立たないと強く感じる」の質問には「そう思う」（17.7%）

「どちらかというそう思う」（34%）と併せて 51%が回答し、「そう思わない」は 11.6%で他国に比べ一番少ない数字でした。

日常生活全般にわたって学ぶ家庭科教育を通して、自他の人権を大事にし、自己を肯定的にとらえ、どのような事を学べば、自信につながるのか、高校生に気づいてほしいと願います。

Contents

巻頭言 1
報告 「生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会」・事務局からのお知らせ 2~3
2021 年度各地区活動報告 4~7
生活やものづくりの学びネットワーク 第 13 回（2022 年）総会資料 8~11
「2022 年度 公開フォーラム」のご案内 12

報告

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会 「GIGA スクール構想と ICT 教育：家庭科と技術・家庭科における現状と課題」

2022年3月27日(日)、13:30~16:00、「春の学習交流会2022」が開催された。Zoomによるリモート開催で、約40名(内会員30名)が参加した。テーマは「GIGA スクール構想と ICT 教育：家庭科と技術・家庭科における現状と課題」で、ICT 教育は中学校の学校現場でどのように取り組まれているのか、GIGA スクール構想は子どもたちの学びにとってどのような課題や可能性があるのかについて考えようという企画である。後藤直先生(新潟県三条市立第一中学校)からは「GIGA スクール構想と ICT 教育」、藤澤泰行先生(川崎市立川崎高等学校附属中学校)からは「1人1台端末の活用とその効果」と題しての実践報告をしていただいた。実践報告を受けてグループワークを行ない、その後グループからの報告を受けて交流し、テーマを深めていった。

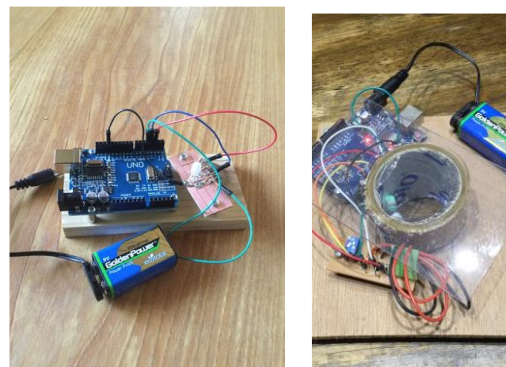
【講演の概要】

後藤氏から、GIGA スクール構想より前に、技術の授業ではコンピュータの活用が行われていること、学習指導要領でもその取扱いに大きな変化はないことが指摘された。小学校の学習指導要領で「プログラミング的思考」とあるが、身につけさせたい力をまずは明確にする必要性が言及された。

勤務校での授業では GIGA スクール構想で貸与されたタブレットで、Google アプリの「スプレッドシート」を用いてプログラミング授業を実施しており、その「スプレッドシート」内の拡張機能である「Apps Script」というプログラム言語を用いている。授業の原型には、30年前の産業教育研究連盟の先輩方の実践があり、これから先もこうしたスタイルが続くと想像ができる。にもかかわらず、「プログラミングに不慣れな先生」とされる背景には学校によるプログラム環境の違いや、プログラム言語の度重なる変更がある。

GIGA スクール構想による1人1台の端末を使った学習では「情報収集や活用の力が高まる」ことが期待されている。しかしながら「学習は楽しかったが、何を勉強したのか思い出せない」という生徒の言葉からも、調べ学習などでの活用も「きちんとした教科の力」が身につけていることの見極めが大切なのである。そのための取り組みとして、計測と制御の教材を持ち帰ることができる程度の値段で自作をする取り組みをしているところである(画像参照)。GIGA スクール構想のタブレットを使った「情報の活用」では、調べたことで満足してしまわない、そして身につけるべき「教科の力」が疎かにならない

いたための工夫が求められ、本格導入前にこうした議論が必要であったことが指摘された。



画像：計測と制御の教材例(後藤氏)

藤澤氏の勤務校では、BYOD (Bring Your Own Device) という形で1人1台の端末が導入されており、端末・ソフトウェア・保守代は保護者負担である。授業では、1年次に毎回5分間のタイピング練習をする。タイピングの上達によって、入力時間を減らし、思考・作業の時間を増やすためであり、以下のような具体例が示された。

技術分野では実験データをスプレッドシートに入力し共有することで、考察・分析、意見交換の時間を増やせた。家庭分野では、1日分の食事を考える際に、Excel を利用することで計算に要する時間を減らし、思考・作業の時間を増やせた。基礎縫いではビデオクリップを利用することで、全体説明の時間を減らし、作業時間を増やせた。反転学習にも用いることで、個別指導の時間が減り生徒との対話が増えた(画像参照)。

つまり、1人1台端末の活用によって時間の自由度が上がり、生徒は、「課題の時間切れが減る」「課題に取り組む意欲が上がる」「課題へのできた感が上がる」、教員は、「説明者ではなく指導者になれる」「多くの生徒と関わる機会が増える」といったメリットがあるという報告がなされた。

実物投影機(OHC)とOHC用ペンタブレットを活用して作製	反転無し	4期生	11時間	63/120
	反転有り	5期生	12時間	92/120
授業時間は1時間は45分				

1クリップ当たり2~3分程度授業開始前に視聴

Junior High School Attached To Kawasaki Municipal Kawasaki High School

図 1人1台の端末を反転学習にも活用

●情報交換会と講評

参加者は4つのグループに分かれ、世話人の進行の下、講演の感想やご自身の取り組みや課題などについて意見交換が行われた。講師の方々も各グループに参加され、質問に直接回答していただき充実した時間となった。

どのグループでも、プログラミング教育をどのように捉えるか、教科が目指す方向の中でどのようにそれを位置づけるかといったことが議論の的となっていた。これまで積み重ねてきた授業の工夫の中に、GIGAスクール構想やICT教育を取り込むことによって、さらに魅力的な展開を考えていくことが求められていると感じた。

●参加者の感想から（一部抜粋）

- ・技術科、技術・家庭科の先生からの講話で新鮮でした。
- ・ICTを使うよさや、何のために使うのか、どんな場面で使うのか、をよく考えて授業の中で使いたいと思いました。
- ・ICT教育の推進には、環境整備と教員の研修の機会の充実、サポートスタッフの配置、少人数学級が重要であると思いました。
- ・藤澤先生の「使わない理由を考える前に、使って得られる効果を語り合おう」という言葉が印象的でした。
- ・端末をツールとして必要な授業場面で効果的に使って教育を行いたいと思いました。

（文責：知識 明子・小野 由美子・藤田 智子・鈴木 明子）

事務局からのお知らせ

1. 年会費の納入をお願いします

2022年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。9月30日までに納入をお願いいたします。

2. 学習交流会等への活動補助費を支給しております

これまでも都道府県別の学習交流会等に活動補助費（1万円）を支給しておりました。コロナ禍ではありますが、学習交流会等の活動を支援し、本年度も同様に支給しております。事務局までお申し出ください。

3. メーリングリスト（ML）にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください

MLを活用して、迅速な情報配信や交流をはかりたいと考えております。多くの皆様の登録・活用をお願いいたします。MLにメールアドレスを登録すると自分で配信することができます。添付ファイルもつけられます。不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。MLへのメールアドレス登録を希望する方は、事務局まで、メールアドレスをお知らせください。

（MLアドレス：seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com）

4. 新版ビジュアルパンフレット（2019年4月版）を活用ください

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

- ・パンフレット代：無償
- ・送料：会員拡大用に使用する際は無料
大学等の授業で31部以上は着払で有料（ただし30部までは無料）

なお、HPにパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

5. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所をお願いします。

6. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp
ホームページ URL：<http://seikatsunet.g3.xrea.com/>

2021 年度各地区活動報告

1. 山形県の活動報告

【研修会概要】

○日時：2021年12月25日（土）10：00～12：00

対面とオンライン併用ハイブリッド開催

○研修内容：

第一部

・技術分科会「Pythonを使ったプログラミング学習入門」
講師 伊藤礼輔准教授

・家庭科分科会 ①学生研究発表 ②視聴覚教材の検討
第二部 YouTubeを使った視聴覚教材作り 参加者
一般の方14名（うちオンライン参加6名）、本学部4年
生4名 計18名

山形サークルはこれまで家庭科教育に関する研修を
主に行ってきましたが、今回は新たに技術科教育に関する
研修も行い、活動を拡充しました。

当日は二部構成とし、第一部は技術科分科会と家庭科
分科会を対面で行いました。技術科分科会は、大学院教育
実践研究科の伊藤礼輔准教授を講師に Python を使っ
たプログラミング学習を研修しました。家庭科分科会は、
学部4年生の卒業研究中間発表と視聴覚教材のアイディ
ア検討会を行いました。卒業研究中間発表のポスターセ
ッションは、一般参加の皆様からも関心を持ってお聞き
いただき、質疑応答が活発に行われ、学生たちの励みにな
りました。視聴覚教材のアイデア検討会は、石垣が
ファシリテーターを務め、はじめに現行小学校教科書掲
載の動画資料等を紹介し、中学校や高等学校の現場での
視聴覚教材の活用状況について情報交換などを行いました。

第二部は家庭科と技術科の参加者が合流し、YouTube
を使った視聴覚教材作りに挑戦しました。伊藤礼輔准教
授を講師に、15秒ほどの動画をその場で作成し、「生活
やものづくりの学びネット山形」のYouTubeサイトに各
自アップロードすることができました。今回試作した動
画は、ミシンの糸かけ、玉結びなどです。教科書掲載の
視聴覚教材で説明不足の点を補ったわかりやすい教材の
開発をめざし、皆さん互いに教え合ったり、協力しなが
ら、熱心に取り組みました。今回伊藤先生が立ち上げて
下さった「生活やものづくりの学びネット山形」の
YouTubeサイトを今後も活用し、各自が作成した動画を
アップロード・共有し、充実した視聴覚教材ライブラリ
ーにしていきたいと考えています。また、オンライン参
加の方には、対面参加の方に比べて、操作の説明や質疑

応答への対応が十分にできませんでした。今後改善して
いきたいと思っております。

【参加学生の感想】

- ・中間発表を行っての一番の収穫は、現場の先生方の意
見・感想をいただけたことです。今回家庭科の先生方
から質問・感想をお聞きして、開発した授業では中学
校家庭科との接続をどのように考えているのか、小学
校ではどこまで到達できればよいのかなど、これまで
あまり意識していなかったことに気付くことができ
ました。卒業論文の完成前に、多くの先生方から見て
いただけたことはその点においてとても有意義でし
た。今回お忙しい中、発表を聞いていただいた先生方、
研修会の運営に携わってくださった全ての皆様に感
謝申し上げます。
- ・今回初めて対面で卒論の中間発表をさせていただき、
緊張もしましたが、自分のこれまでの研究をしっかり
振り返ることができたり、他の学生の方の発表も聞く
ことができたので、違った見方や考え方ができたりし
て良い機会になりました。質問やご意見をなどもいた
だき、今後卒論を書き進めていく上で大変参考になり
ましたし、改めて最後まで卒論に精一杯取り組みたい
と思えました。この度は、ありがとうございました。

（文責：石垣 和恵）

第1部 家庭科分科会

●学部4年生の卒論中間発表ポスターセッション



第1部 家庭科分科会

●視聴覚教材作成のアイデア検討会



第2部 「YouTube を使った視聴覚教材作り」

(講師 伊藤 礼輔 准教授)



2. 千葉県の活動報告

1. 日程 2022年3月26日(水)
午前10時30分～午後12時15分
2. テーマ「マスクと私たちの未来
—SDGs から考えよう—」
3. 講師 中山 節子 氏
(千葉大学教育学部, 家庭科教育)

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、第9回学習交流会を2022年3月26日(土)にZoomと対面(千葉大)でのハイブリッド方式で開催しました。

千葉県では、現場の授業に還元できるような内容をと毎年企画実施しております。今年度は、中山節子先生による「マスクと私たちの未来—SDGs から考えよう—」をテーマとしました。私たちに身近なマスクを取り上げ、マスクを通して見える様々な社会的課題について、SDGs(持続可能な開発目標)との関連を考えながら、ワークショップ形式の学習会を開催。千葉県会員限定で、9名(対面4名、Zoom5名)の参加を得ました。小学校・中学校・高等学校・大学の教員と学校種も多岐にわたりました。なお、事前にワークショップで用いるマスクのキットを含む資料教材を参加者に郵送しました。

<ワークショップの内容>

まず、マスク3種類(高機能マスク、天然コットンマスク、不織布マスク)のうち2種類を選び、外装表示から素材、マスクの構造、原産国、形状などの情報をチェックし、品質性能などを整理しました。次にマスクがどのような構造になっているか(表示では3層、4層、5層といろいろ)マスクを切って分解し、台紙に外側、中間、内側と貼り付けて、感触や厚さ、素材などを観察チェック(写真①)。その後皆で比較発表をしました。

<マスク題材をもとにSDGsにつなげる>

教材「マスクと私たちの未来—SDGs から考えよう」(8頁の冊子、写真②)をもとに、マスクを通して見える社会的課題について考えました。「マスクのライフサイクルから」はSDGs目標12「つくる責任・つかう責任」に、「廃棄されたマスク等のプラスチック製品の行方」はSDGs目標14「海の豊かさを守ろう」に、「マスクがもたらす『マスクシンドローム』」はSDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」のゴールとつながっていることがわかります。前記の教材を用いてどのように授業が展開できるか、千葉大学教育学部附属中学校での授業風景の様子も提示していただきました。

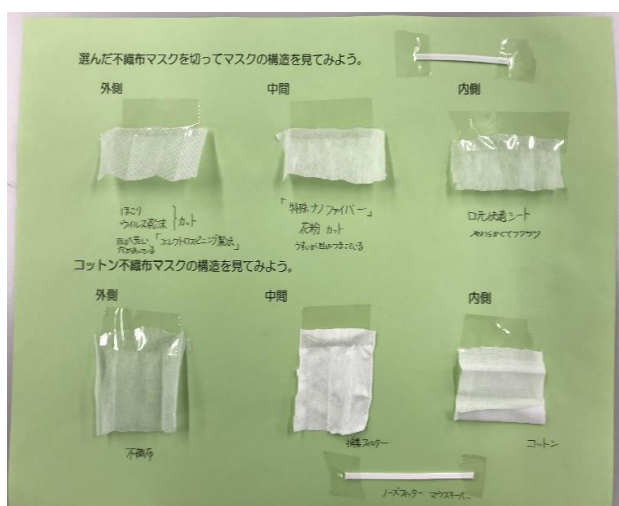
中山先生から、SDGs目標3に関わる福祉について、「本来の全ての人を対象にした共生や人権意識の醸成や社会的課題に立ち向かう力を育成するという福祉教育目標が、現実には障がい者・高齢者など特定の対象者に限定される福祉教育実践が多く行われている傾向が見られる」との指摘・課題があげられました。

最後にSDGsへの興味関心が低いという高校生の調査実態から、生徒のSDGs理解や実践が進むには、押しつけにならないよう身近なものからゴールに結びつけたり、広いテーマに結びつけたり、理解が先に来て考えそれが行動に結びつくような教材開発が必要であることを再認識しました。

<参加者から>

- マスクがどのように SDGs に結びつくのかと思いましたが、マスクを分解して観察するワークショップはなかなか面白く、そこから広いテーマ、深いテーマに結びつくことを実感できました。楽しく充実した学習交流会でした。
- マスクの題材は生徒も興味関心をもてる教材だと思います。学校では昨年度に引き続きクロスカリキュラムを予定しています。今日の教材は家庭科・保健体育・社会・理科等他教科にも広げられます。
- 大変有意義な講習を受けることができました。行き詰まっていた SDGs から考える学習の基本を教えてくださいました。マスクだけではなく食生活や住居でも活用させていただけるように思いました。(文責：小谷 教子)

<①マスクの構造(外側・中間・内側)>



<②教材「マスクと私たちの未来—SDGs から考えよう」>



3. 東京都の活動報告

2020 年度は記録が何もなくコロナ禍で活動ができなかったことを再確認した。
2021 年度はオンラインでの実行委員会を 4 回開催した。また、例年 2 か所で 2 回ずつ実施している江戸川区小学校すくすくスクール（児童館と学童クラブの機能を兼ね備えたような江戸川区の施設）での縫い物、編み物講座も 1 か所で 1 回開催するとともに、授業実践交流会を開催した。その際に活動補助費を有効に利用させていただいた。お礼を申し上げるとともに今後も継続した支援をお願いしたい。以下詳細を記す。

A 活動報告

I 編物講座の開催

1 江戸川区中小岩小学校すくすくスクールでの活動

- 2021 年 12 月 27 日 (月) 11:00~16:30
- ・内容—「ミニ巾着」の編み物指導
- ・参加者—3 年 3 名, 4 年 3 名, 5 年 1 名 計 7 名 (女子)
- ・当日講師—東京実行委員 5 名, 会員 1 名, 会員の友人 1 名 計 7 名



2 成果

参加児童は、一生懸命製作をしものづくりの楽しさ、達成感を感じるとともに丁寧な指導に満足していた。児童は大部分が自分の意志で参加していた。編み物の教材については大部分が未経験だったので、かなりハードルの高い内容ではあったが、糸、かぎ針の持ち方、鎖編みから練習して約 2 時間で努力して仕上げた。家庭科を学習していない 4 年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの実感を強くした。編み物については 1 対 1 で対面指導ができたことで講師陣にとっても充実した効果的な指導ができたといえる。



製作した編み物のミニ巾着と共に

II 春の授業実践交流会の開催

1 スケジュール

- ・日時：2021年3月21日（月）14:00～16:00
- ・方法：オンライン
- ・内容：授業実践報告後グループに分かれての交流
- ・題目「調理実習授業をどうとらえるか？」
—調理実習授業での学びとコロナ禍における
少人数での取り組みから—
- ・実践報告者：浅井直美氏（元東京都江戸川区立松江
第五中学校家庭科教諭）

2 成果

調理実習に関する内容は家庭科の授業担当者等にとっては興味深いものであるため、このテーマでの授業実践報告はタイムリーであった。この中で家庭科や調理実習の意義や歴史、工夫が語られ報告は大変参考となり有意義なものだった。

事前に申し込み者に「コロナ禍で調理実習ができたかどうか」のアンケートをしたことで、グループ別交流の基礎資料になった。グループで話し合ったことでテーマに関して理解が深まった。

B 課題

編物講座については、これらの成果を今後どのように「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的に組み込んで、地域の方にアピールするとともに家庭科教育の充実につなげていくかである。

（文責：愛国学園短期大学 亀井 佑子）

4. 長野県の活動報告

2022年3月6日（日）13時～17時まで、信州大学教育学部において令和3年度の長野県学習交流会を開催した。参加者は高校教員3名、中等学校教員1名、学生2名、対面4名、講演のみ遠隔2名（図1）、男性0名、女性6名、会員2名、非会員4名で合計6名あった。

前半で、帽子製作を教材にした「教育学部大学生を対象とした課題研究の実践」と「身の回りの糸の基礎知識」の報告および講義を福田が行った。後半は、「糸ボタンの応用」のワークショップとしてサンプル試作等個別に教材研究を行った。最後に作品を見合う会（図2）と制作後の感想発表を行い、日々の教育活動等に関する意見交換を行った。

参加者より「学生さんの意識など、勉強になった。本当に面白かった。」「綺麗ですね。糸・布。」「糸を活用した糸ボタンの奥深い世界を学ぶことができて良かった。残り糸や不要になる紙やコルク栓などを活用し、衣生活を豊かにしていく教材研究ができた。」「繊細過ぎるくらいの内容でした。糸から学ぶ繊維材料の入り口として糸から作品（形）となる魅力がある」「余りものを材料とし

た視点はSDGsの教材として扱えそう。」「糸は太い方が綺麗に見える気がした。しかし、太すぎると針穴に通らないので、留めることが難しかった。」「糸を綺麗にそろえて巻く工程が楽しかった。ベースさえできていれば、教材としても活用できると思う。」「糸の新しい活用法として楽しく取り組めた。来年度以降の実践に繋げていきたい。」「久しぶりの対面の会は充実していた。」「楽しい時間の共有ができた。」「一期一会の素晴らしい日だった。」「といった感想が述べられた。

年度末の忙しい時期であっても、参加人数は少なかったが、やはり対面を基本に企画したため、参加者からの満足度は高く評価され、非常に有効であった。講義のみ対面と遠隔のハイブリッドで、制作実習（教材研究）は対面で実施したので、非常にやり易かった。事前に遠隔参加希望者が多い場合、材料や用具の郵送料を心配したが、この点に関しても不要であり、非会員の参加費の徴収も容易であった。今年度も活動補助金をいただいたことに感謝申し上げます。

（文責：信州大学 福田 典子）

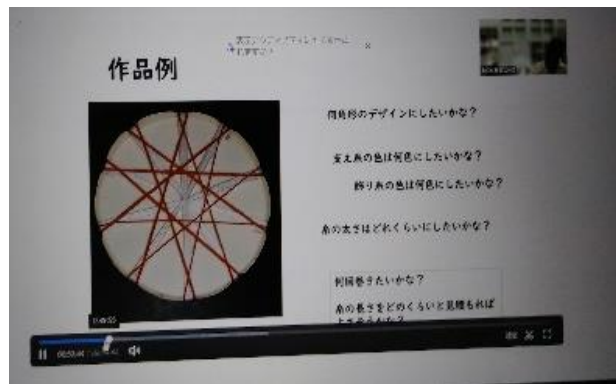


図1 対面と遠隔のハイブリッドでの講演風景



図2 六角形2色ディスクタイプ作品例



【報告事項】

I 2021年度活動報告 (2021年4月1日～2022年3月31日)

1. ネットワーク参加人員数

2022年3月31日現在 個人会員 330名 団体会員 18団体

2. 交流会の開催

シンポジウム

日時：2021年9月26日(日) 10:00～12:30 Zoomによるオンライン開催

テーマ：技術科と家庭科の「ものづくりの学び」—子どもたちの学びの保障から考える—

話題提供者：内糸 俊男 氏 (北海道檜山郡厚沢部町立厚沢部中学校)

浅井 直美 氏 (元 東京都公立中学校)

コーディネーター：石井 克枝 氏 (元 千葉大学/全国家庭科教育協会)

春の学習交流会

日時：2022年3月27日(日) 13:30～16:00 Zoomによるオンライン開催

テーマ：GIGAスクール構想とICT教育：家庭科と技術・家庭科における現状と課題

講師：藤澤 泰行 氏 (川崎市立川崎高等学校附属中学校 技術・家庭科)

後藤 直 氏 (新潟県三条市立第一中学校 技術科)

司会：知識 明子 氏 (NPO 法人家庭科教育研究者連盟)

3. ロビー活動

コロナ禍の収束が見通せない中、ロビー活動は中断されて現在に至る。

4. 会員の交流および宣伝活動

- ① ニュース発行第21号(2021年8月)、第22号(2022年2月)が発行された。
- ② コロナ禍で活動が制限された県(支部)が多かったなか、4県で対面、Zoomやハイブリッドで活動が行われた。
- ③ メーリングリスト上での情報発信や意見交換が行われた。
- ④ ホームページを適宜管理した。

5. 各会議の開催

(1) 総会

日時：2021年9月26日(日) 12:00～12:30

シンポジウム終了後、Zoomにて開催、総会資料は「生活やものづくりの学びNet ニュース」21号(2021年8月発行)に掲載

内容：2020年度活動報告・決算報告

2021年度活動方針・予算案・運営体制

(2) 実行委員会

山形県、長野県、千葉県での学習交流会実施について、「生活やものづくりの学びNet ニュース」21号の掲載及び総会で報告

(3) 世話人会

- 第1回 2021年6月27日(日) 10:00~12:00 Zoom
第2回 2021年7月18日(日) 13:00~14:20 Zoom
第3回 2021年9月15日(水) 18:00~19:30 Zoom
第4回 2021年10月5日~10月11日 メール会議
第5回 2021年11月7日(日) 13:00~15:00 Zoom
第6回 2022年1月8日(土) 10:00~11:30 Zoom

II 2021年度決算報告(2021年4月1日~2022年3月31日)

収入

(単位:円)

科目	予算	決算	備考
2020年度繰越金	699,912	699,912	
個人会員年会費	300,000	437,000	延べ437人(16年5件, 17年16件, 18年20件, 19年34件, 20年62件, 21年212件, 22年以降88件)
団体会員年会費	130,000	160,000	1口5,000円, なるべく2口以上, 延べ19団体(19年1件, 20年1件, 21年16件, 22年1件)
寄付	20,000	78,000	個人会員より18件
雑収入	0	0	
利息	5	8	
計	1,149,917	1,374,920	

※個人会員330名 団体会員数18団体(2022.3.31現在)

支出

(単位:円)

科目	予算	決算	備考
印刷代	100,000	83,600	ニュースレター(2回)
送料	120,000	87,350	ニュースレター発送, 資料・パンフレット等の発送代
事務用品	5,000	110	カラーシール
活動費	45,000	30,000	地区活動補助(10,000円×3県)
HP・ML管理費	40,000	23,851	HP更新, ML管理(メールサーバー使用料, ドメイン更新料)
会議費	5,000	0	
イベント運営費	50,000	35,000	シンポジウム・春の学習交流会の講師謝礼
事務局・アルバイト謝金	105,000	105,000	会計, 会費管理, 名簿管理等
日本家庭科教育学会事務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	659,917	0	
小計	1,149,917	384,911	
次年度繰越金(残高)	0	990,009	
計	1,149,917	1,374,920	

監査の結果相違ありません

2022年4月30日

会計監査 上村 協子 ⑩

会計監査 大塚 有里 ⑩

【審議事項】

I 2022年度 活動方針 (2022年4月1日～2023年3月31日)

1 生活やものづくりに必要な学びの意義について広く討論をすすめる

- ① 学校や教育課程の在り方を含めて、生活やものづくりの学びについて、意見交換や学習会等を開く。
- ② マスメディアなどを通して活動を広報する。

2 生活やものづくりのための授業・実践活動を充実させ、交流する。

- ① 各県の授業・実践活動を中心とした学習交流会を開催する。
- ② 授業・実践活動交流会は、保護者や地域の人々の協力を得るように努める。
- ③ 授業・実践活動交流会などの小集会には、補助金1万円を支給する。

3 啓発・宣伝および会員の拡大をする

- ① 学習指導要領の改訂や新しい教育動向を反映させた新版のビジュアルパンフレット(2019年4月版)等を活用し、生活やものづくりの学びの意義を広くアピールするとともに、勧誘(改訂版)リーフレットを用いて会員を増やす。
- ② HPを充実させ、本ネットワークの意義と活動を知らせていく。

4 会員相互の交流を活発に行う

- ① ニュースレターを年1・2回発行する。
- ② メールングリストやHPを活用し、会員相互の活発な情報交換の場とする。

5 ロビー活動を行う

- ① 世話人会と事務局はロビー活動を推進する。中央教育審議会委員や関係部署に、家庭科、技術・家庭科の充実に関する要望書を送付するほか、面談の機会を持つようにする。
- ② 各実行委員・会員は、ロビー活動を行い、状況を把握し、会員に情報を伝達する。

II 2022年度 予算案 (2022年4月1日～2023年3月31日)

収入

(単位:円)

科目	決算(2021)	予算(2022)	備考
前年度繰越	699,912	990,009	
個人年会費	437,000	300,000	1口1,000円×(延べ300人)
団体年会費	160,000	140,000	1口5,000円,なるべく2口以上(延べ18団体)
寄付	78,000	50,000	
雑収入	0	0	
利息	8	5	
合計	1,374,920	1,480,014	

支出

(単位:円)

科目	決算(2021)	予算(2022)	備考
印刷代	83,600	100,000	ニュース(2回発行),資料コピー
送料	87,350	100,000	ニュース,資料等の発送代
事務用品	110	5,000	封筒,ラベル
活動費	30,000	45,000	ロビー活動,小集会・学習交流会補助
HP管理費	23,851	40,000	HP更新,ドメイン・メールサーバー使用料
会議費	0	3,000	世話人会・実行委員会の会議費
イベント運営費	35,000	100,000	講演料,会場費等
事務局・アルバイト謝金	105,000	105,000	会計,名簿管理,発送作業等
日本家庭科教育学会事務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	0	962,014	
次年度繰越金	990,009	0	
合計	1,374,920	1,480,014	

Ⅲ 2022年度 運営体制

<◎世話人代表, ○世話人副代表>

	2021.9～2022.9	2022.9～2023.9	選出団体
世 話 人	◎堀内 かおる	◎堀内 かおる	日本家庭科教育学会
	○石井 克枝	○石井 克枝	全国家庭科教育協会
	○鈴木 賢治	○鈴木 賢治	産業教育研究連盟
	知識 明子	知識 明子	家庭科教育研究者連盟
	薩本 弥生	川端 博子	(一社)日本家政学会
	鈴木 明子	鈴木 明子	(一社)日本家政学会家政教育部会
	小野 由美子	鎌田 浩子	日本消費者教育学会
	藤田 智子	渡瀬 典子	日本家庭科教育学会関東地区会
	吉井 美奈子	未 定	(一社)日本家政学会生活経営学部会
	菊崎 泰枝	小西 史子	(一社)日本調理科学会
	川邊 淳子	川邊 淳子	日本家庭科教育学会
会計監査	上村 協子, 大塚 有里	上村 協子, 新井 映子	★任期は総会から総会まで(例年9月の第4日曜日)としています。
実行委員	各県, 正・副2名を基本とする		
事務局	浅井 直美, 小谷 教子, 坪内 恭子, 渡邊 彩子		

※総会につきましては、今号の掲載をもって書面審査とさせていただきます。ご意見等がありましたら、9月10日(土)までに事務局にメールでご一報ください。ご意見がない場合は、ご承認いただいたものとみなします。なにとぞよろしくお願いいたします。なお、世話人一覧の未定欄は、各団体の役員交代時期がこれからのため、ご了承ください。



会員継続のお願いと新規入会のお誘い

- ★本会は、2010年の設立以来、経験豊かな会員の方々から、これからの家庭科、技術・家庭科を担う若い会員の方々まで、幅広い年齢層の会員の皆様に支えていただき今日まで活動を続けてまいりました。これからも、皆様のお力添えをいただきながら、生活やものづくりの学びの意義と授業実践の成果を発信・共有してまいります。長きにわたり本ネットワークを支えていただいた皆様におかれましては、ご退職を迎えられる機会にあっても、引き続き会員を継続し本ネットワークを応援してまいりますよう、心よりお願い申し上げます。
- ★家庭科、技術・家庭科の今後の発展のためには、この教科の重要性について声をあげていく必要があります。家庭科、技術・家庭科の魅力を、ご一緒に発信していきませんか？一人では難しいことでもネットワークとして力を結集すれば可能です。そのためにも、会員を一人でも増やしていただきたく、お願いいたします。入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。ネットワークを周りの方や研究会のメンバー、教員、学生、保護者、一般の方にご紹介し入会をお勧めくださるようお願いいたします。

世話人代表 堀内 かおる

生活やものづくりの学びネットワーク

公開フォーラム

ものづくり教育再発見

2022 年 9 月 25 日 (日) 13:30~16:00

Zoom による遠隔開催 ※参加費無料

コロナ禍の完全な収束への見通しが立たない中、実践的・体験的な教科である家庭科、技術・家庭科では、授業の中で子どもたちが自ら体験を通して学ぶ機会が制約されてきた。しかしそれでも、学校現場では教師たちの様々な工夫によって、子どもたちはものづくりを経験し、学びを積み重ねている。

授業時数の少ない中で技能習得のために十分な時間をかけることが難しいという課題はあるが、ICT 活用による E-Learning の教材開発も行われ、ものづくり教育は新たな側面を迎えていると考えられる。

買えば済む時代に、ものづくりを学校で学ぶことの今日的意義とは、どのようなことなのだろうか。コロナ禍を通して明らかになったものづくりに関わる教育の課題とともに、ものづくり教育の意義について、改めて問い直す機会としたい。

●コーディネーター：堀内 かおる 氏 (横浜国立大学教育学部 教授)

川邊 淳子 氏 (北海道教育大学教育学部 教授)

●講師：鈴木 明子 氏 (広島大学大学院人間社会科学研究科 教授)

鈴木 賢治 氏 (新潟大学教育学部 教授)

参加を希望される方は 9 月 16 日(金)までに事務局の Web サイトに掲載のフォーム

(<https://forms.gle/diVIJLC3JUwk568M7>)

あるいは右記の QR コードからお申し込み下さい。

参加方法は、申し込まれた方に後日ご案内します。



生活やものづくりの学びネットワーク事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 4-39-11 仲町 YT ビル 3F

日本家庭科教育学会事務局気付

E-mail: seikatsu_nt@yahoo.co.jp

Web サイト: <http://seikatsunet.g3.xrea.com/>